新板

花弥匠物語

四

へ13
3035
4

門へ13
號 3035
巻 4

昭和九年
七月二三日
購求

斐陀匠物語巻之四

○よめの君

山人はむらさきを船にて見らしなひて川岸をかけたしやさるよひは是ぞ影をぶらに見ざるだせんすべなく心ならざて家にかへりて一二日ありしは是ぞおとづまをぶらに少事なし思ひ事みて食事も咽をとほらざるぞ松光が許へ人をやりて。やうすをもとすぐやと。ひそう井みしらぬ居るおうら母奥より出来てはふれ父の殿の忌日なるぞ精進物とのべて佛前にまゐらせんとす。おとともまうなひてなへといへば山人みかきさして佛壇の塵かきたらむ。みあらしとのしつゝふと佛のおまへを見るぞふさま式紙佛の法ひざの上にのせてあり取り見るぞ墨ぐろにて玉川にさらさてつくりさらくにと書て下の句はなし不審に思ひて母に向ひて此志きしは常に目にふるぞる物

まくは。いかなる人の筆よりも宜しからず母がいたく。悲しとて、その父の情からとど
なれ。其子細かたらせ給ひてん。おのれハ此家の下女なれども、ありのまゝに語る
なり。かなしき父の上の。ひそかにおもろざしを見せ給はぬ。其御かたらひ
てなるに本妻の妬みふかく。かねてよりすゝかにもかひなるに。志ざし我をぞ。
親里にかへしなさきに。其時おのれ懐妊して。ほどなく一人の男子をうみぬ。その
事本妻にきこえなば。いかなる事か出来なんと。葉の上より其子をば
玉川なる百姓のもとにつかはしぬ。其時父君の筆ずさみに。玉川にさらせ
てつくりたるにかはぞとこの子のしるしかなしき。式紙に一首をかゝし
ならく半より此式紙を引きさきて、下の句ハ産子のまもりにをさめ。上の
句の方ハ其子にあづけて置きなひぬ。其後本妻も死なれしが、終に悼む事なく
て。川主上の家に戻なくなりさせて。あんさしへ。その母ハぬし。ちとも生をもらし。

かの玉川の百姓も死うせけるとて。其のち母もつとめかよひしつゝほどなく
かくも。なくなりたりつれし。其子の生死をだにしらざれど。此家の内に入て
そのうちたがをつかはしのよき力草なれるを。行方しれぬゆゑに、ありし巣
もおちさりなき世にてありけると。涙をおとして語りけり。山人も父のかたみ
の筆のあとをながくおもてびたりしかばまで。その母涙にくれて子を呼びかゝるに
より、奥の方よりかなどを荷ひて庭ばたにひそに出る者あり。よく見れば
我家のかなどなりし。盗人とさんざんに山人をとびかゝりて。かなどを手を
かけて引ぬすまんとす。盗人ハふりきりて行かんとするを。母も手を立てゝ
白昼に人の家にいる盗賊いかで赦さんとさけびよるが。盗人ハ
母をつきのけ山人をとりつきて、からだと申もあらで盗人をもちたる棒を
ふりて山人を打んとす。母をもおなじく打すゑてみせ笑ひつ。

頬ゆぶりとりて山人ことを見まりしやといふをあふぎ見まづさきに獄
屋に入りし廣岡なり山人声をあげて汝まことも来つて己れに冠するゆや
といへば廣岡うなづきて国司の廳に引出され汝らがこめに家をうしなひ
おひ出されたる廣岡なれば汝らを恨こざらん今日こゝ母入り
おそこるは汝が蓄へ蓄る衣類調度を奪ひとり さて汝親子を殺さんこめ
母忍び両たり死出の旅の用意せよといひさま又ふりあげて志たる母うつ
母その手にとりつくをひつとらへて一間だより投つけてとく此世のいとは
とらせんとてうりやにかけいりて庖丁とつてをどり出れば母そおもてを
さしてあげ出さを追かけて切戸を出るに出ひかけざ大なる男のまり戸乃
そこに立ちはるが廣岡がわちたる庖丁わぎとて足をあげて蹴ゆりたれ
ば あふむけに倒れたるを無かりて志たるに踏つけて竹芝親子を

害せんとする汝なれば命ことまけておきがたしといひさま両手に廣岡
をかいつかえて目より高くさしあげて忍びといひさま前なる川口投おとへ
廣岡はあッとさけびたるまゝ水にまかれて流れ行しを心地よくぞ見えたり
はるかの男は老母が手をとり切戸をいりて山人が打さゝられたるをとかく
介抱して さのこの上に抱きあげて水など飲せてあつかふを母はうれしきが
中母もいぶかしくてそもいづくの法人におはして口れくをこゝまけてゆつるぞ
と手をあはせつゝ禮をなせば かの男母が顔を打まもりてふとこゝ後よりて
たゝり紙とり出て志れおぼんおはせあやとて出さをおぼくしれば取
あぶりてひらき見れば式紙のなるをきりしるふてよみ見れば母そこの
このとゝかなしきとしるしてあり母おどろきて此しきしは我つまの手跡
なり これをわちておはせれいかなる人ぞと不審されば かの男なる母を

廣岡
ひそうに
山人が
家にいりて
物ぬすとこく
山人が母を
叙さんとして
棹元にいで
生あひ
あらそふ所

しさりて頭をさげてゐるは。おのまことそ初生の頃。玉川の百姓がもとへつかはさまし。幼名はてつくり丸にてゆくといふに。母親又おどろきて。つとそばへさしよりて。つくづくと顔をながめて廿余年はつゞそぬまことたの耳の黒痣といひ。おもざしも父君の顔に見えたる所あり。扨はいづ子のてつくりかとて抱きつきて。なき出さ。山人もいひよらぬ兄君の此對面と。頭をさげて。よろこび泣に涙おとせば母涙をかきたらひて。玉川の百姓の家は跡もなく死うせられば。そこの行方を尋んに。手がゝりしるべもあらざまだいかで佛神の此めぐみにて。ひとさひて。めぐりあはなんと。こがまにこがまし廿余年。焉のなりぬ日はありとも。いひ出ぬ時はなかりしを。なぞてとく尋ねては来らざりし。今はいづこ母まみてあるぞと声ふるはしつゝ宜べ。さんはおのまに立つ。ゆくは時人のもとへもらひ。とくまかしこまく。おひそぶちはるどかの玉川の百姓は。すべらひてうせらくは。

かまいまぶなかくしたりし時。おのまに語りは。いどのく父は。荏原郡にて。酒つくりてあき物さる。竹芝の某殿にておはさ。本妻の妬をおそまに我家にて。そぶてまらせつ折もあらぐ。かしこに往て。親子のなのりしなへと。中国にて。はにはたらぐ芦屋の家の養子となり。今の名は棹丸と申てゆと。語りもあつぬに母さりよりて。其芦屋どのとは。いづまの人ぞと宜べ。さるは我父と不和なりし。石濱なる船主にてゆといふに。母も山人も又驚きて。いふことなし。棹丸かさねてゐるは。おのまに物の心を知りてより。母人をとひまゐらせんとさる。其養父船主どの詞をきけば。竹芝の家とは。仇ありて不和なりと。承りぬ。さらば船主が子と名のりては母人對面しなさばしとやせはしかくやせましと。年月胸をくぶきしなりしにこその春。向ひが岡の花見の比。廣岡が狼藉を見るより。聲をかくして。其場に出て。此事人をたまけしも。おのまに

なりといふより知りながら。其後磨圓がもとへ立かへりてかれが家に
おもむきを告てかへりごとゝり返しあたへせんと。磨圓が家のあたり昼夜
なく伺ひしに。おもてより松光がまかりひそかに塀をこえて出ぬるを見るより
らまことに督母おひまかせ此家ちうまで不まゐらく。恩借はいさゝかしながら。母人を
ぐら母呼寄らず其後別ゆるせしおのれが心を推察あれと語ぞ。
母親さては両度のうきめを救ひしは。おまへとふかくありがたくぞんじいまゝで
さは志らで神佛の化現なりや有がたき人もあるものかなと口につけくらへり
しが神ならぬ身はおそろしきまく。お志とが督子なる我子と志らで
ありけるよ。おまへとが孝の心とどまて今日の命も續まし上給ふさへ
親子兄弟封面に及びぬるは今日の忌日の聖霊のあはれにて。なつかしからんと
共にさうなり。山人も持佛を拜して。よろこびをり。棹丸母の前に手をつきて。

いひけるは今日まで來りしは母人へおのれがねがふむねは娘をめされなんや
といはんがため。かく名のりあらはれ上るは所存あらば何事もかたらひあはせて志らせてよ
べしと詫りてあまりといへば棹丸涙をはらはらとながして。おのれが妹なりしは。
むかさきとや。昔山人をふかく志たひ春のころより病ひつき命も危く
ゆひしに母ふかく此所病いえがたく子ありといへど戀慕の心むねにせまりて
志ひて山人の妻となさんとせちに思ひさだめていもうと母人の御慈悲に
此婚姻とゝのへなば。おのれが悦びは。もとより。かく妹が本望なるべし。さて
ひとたび夫にも逢せなばなんと思ひ入てねがふ故。母志ばし頭かたふけ。さて
ありしが。娘心に志らざりき。我子をあだなる者ぞ。ふしうけひかざるは無人の母
似たれども、父君の代より不和なりし芦屋が家と縁をむすぶべき。父の
詰ならんや。むきもなん父君ながらくおほしまさずしてまことも とかく いさめゆゑ

て此婚姻成就せんやうにあつかひ夕白べ生ど亡人となりなひねまばやん
かしともなき事ぞかしといへば棹丸うなづきて、おとゝりある仰せなくは
といひつゝふところより封じたる。ひとひらの紙とり出し母がまへ出さし
置く。此一ふは妹が娵入のこゝやけの調度わくろく志るせし一通にてはひらは
て此覧あるべしといふに心得ざまど。ひらき見まゞ国司の廳にあらそれ。
田畑をかきたる券なりけり。棹丸猶いひけるは。竹茗の家と芦屋の家争論
に及びしは此券に志るしたる田畑より事おとりぬ。こまを返し来らせなば。
なき父君の此たは母も遺恨はよもの二しなれど。とく此券納めなひ妹が
ねがひをかなへてなへといへば此券我家にかへしおこせるは。そこ一人のところ
なるべし。養父なる船主どのいかで是をもるさべきといふに。棹丸頭をふり
て。養父が心にもるさざるをいかでいふにたらふべきとおかくは。

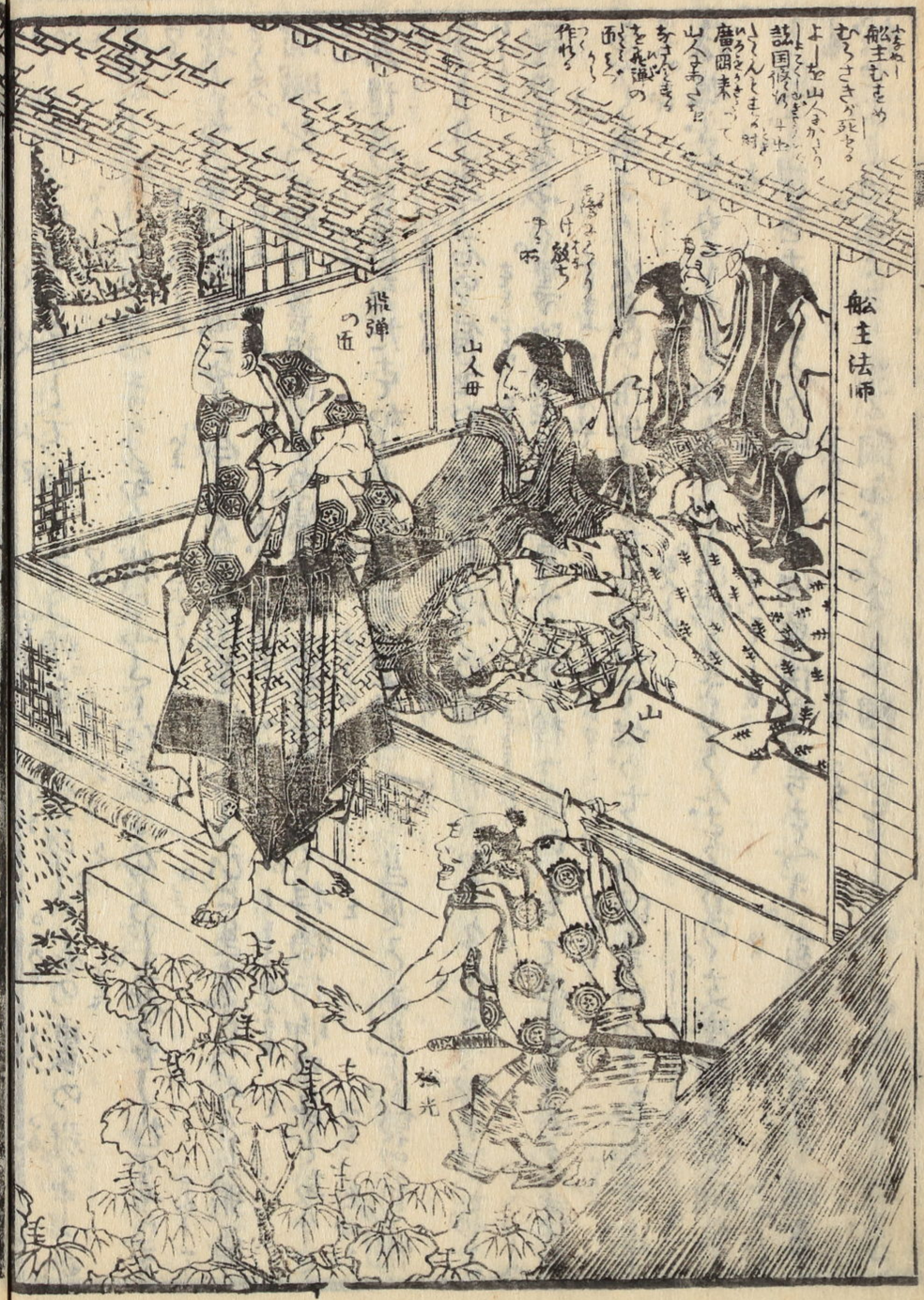
此券をさめなへと志ひて老母がふところにおし入おもての方にたゝひて
事なりぬとくくといへば。かしこに待居たりと見えて石濱が下へとも。
てんで丹白木の墓にきぬ綿などのせたるを打さげ入来て。縁さきそれ
ならぶまゞ。娵の君の輿と見えて。さぞかに舁来て庭にすゑたり。母も
山人も心ならざ。おまりに俄の娵入ゆゑにぞあるてくおまりの時に輿の
戸をひらきて立出る人を見まば思ひもよらぬ芦屋の船主なり。頭に
袋の馬帽子うち着く。身には布の肩衣きて。よろがひつゝ縁にあがまだ。
母も山人もおどろきて又いかなる凶事出来ぬらんと胸とどろきて守りをり。
船主老母のかしこに向ひて。我むさめ。今日志ひて婚姻の一条棹丸をもつて。
さき丹中入たる丹うけひきなきりしよく満足しつ。山人母も今よりは。こまに
までの怨をのこさずこながく朱陳のかたらひしてたべといふに老母さらみ

出てゆさぎ夫婦一世のいはひ事にはを暦ぐらに見ぎて日どりをもえらばぎ
まして俄に女夫の盃せんはかるぐしく。人もはぐときはひなんしなしにても。その
用意しはをんまゝ。吉日をえらびなひてゝ。とあらへおくりなひなんといふを
船主父もあへぎ。老の身は心みじかく若かりし時のおとくのどうに拘を待に
ふへぎ。只今あまゝ夫婦の盃とりかはさせなるべしといひつゝふところ
より一つの位牌とり出して山人がそばに置く。此位牌の娵の君へとくく盃
さしてしばといひさして声をあげて泣いぶき山人いよく心もえぎいふ事く
と色をかへて宮へば棹丸が見ふる声をあげて妹は一昨日の夜ふぶから溢
て死つるはやといふに山人たましひ失るばかり事なりて何事のありて死ふる
ぞと。身をふるはして棹丸が傍によ是ぎ。船主涙をかきのごひて位牌を取て
手ながめいひけるは十四年の此とし月春の花秋の月にもかへて手のうちの

蹄に思ひていつくしみそだてはるに。はうなく見はてぬ夢とはなしつよく
おもひはやぐらせぎ果報つしなき生是なりけり。心ひがをし古翁がおしたちて
のしありしをうらやしばある顔もせぐ。はごくと部屋へ入りしかしが胸に
あまりて山人にそはれ事と思ひつめて命さてはるかはやさよ。さぎなりに
思ふとしらぎ。まげてもやるはべかりしを汝が母の事をせめて娘がいのち
生けてかへせと。事をのしあるにびくに膽にあらへ骨にとほりて五勝六腑
も鱠となりぬぎ。楚山のましらの腸もかるにこそと思ひしりまつりき
娘をさきぶらせ老さらばつる事拘の世にあはよひく何かせんと。位牌を
つゝ此にそへてゝいざち泣ふる血の涙は秋の深山の紅葉ぎを時雨の染る事
あとならぎ山人はしぐ打ふしてかさ雨の人のあらやかしみにあはんと契り
ふし。浅からぬこころざしも浅草野邊の露ぎりあとともかはさでゝ別是

てき猶ありざほに忍びつゝうきを官戸の川つゝに芦とけ小舟思はざれ
はなでとゆゑ玉のをの役はてしあそかなしかはて声もそゞろ丹泣
あるゝ老母もとゆゑ袖を志ぼりてさる真あるとゝろざしを百がひとつも
さとりなぎ又せんかゝるもあるべかりしに。いとほしの舟の果やとて位牌を取
て佛壇に居まぎ山人立て涙ながら金椀に水をたゝへ香爐にくゆらせ
一たきの。けふりのさゑもなつかしとむせかへまぎ母親はかくみさをある
娵の君に娼よとかしづかまてうほどを生せて見ましかばいかばかりうれ
からましをつくさがさくせとそはしなかまと又うちふしてぞ泣にする
棹丸涙の袖をはらひて妹が死せるは悔てかつぐぎ山人が妻となり香花の
供養うつうへ。かまがよろとびまゝるぎ此上は立かつり野邊おくりして
七々の追善讀經ひとなをんとひつぎ船主頭うちふりうき世の欲に

かゝ[illegible]竹芝の家と不和となり娘をさへ失ひしは衣の裏の珠をぞ
見ぬゝぬ凡夫のあやまりなり。我はふたゝび家に為らじ死らせしむさめにそ
我ゝめの善智識なき今より諸国を經めぐらひ。ことまぐつくりし罪障
消滅。かつは娘が菩提のため樹下石上を宿となし。拝撥行脚の身となりし
来世乃苦患をたさてからんとふかく用意しつ。あまり見てあまりし袋の雋帽
ひとりさて右の肩をおしぬげぎ。ひつの間に剃おがちなんまろがしらなる
聖のさゐにて墨染の衣をぞ着たりける。棹丸向ひたちてあとにりある此發心
ながらあまり火急の出ぜもなりせめて姉が七々の法事のひとなるとして
後娘ぶちゆるん事おそからじ。此供にまうらんざるものゝ支度用意も調はじ
といへぎ。世をさてさて出る者の何条供を具さべき。家にかつりて法事
も修せよとはあとこりなる詞ながら。さるは親の心をしも知らぬなりけり。つゝき


船主法師
飛弾の匠
山人母
山人
松光

黄岡
九棹

者をさきにたてゝ。まめやうなる顔つくりていうで持佛の本尊をも見たるべき心のやこのたどくしさハかきくらして家路も志まねば。ゆくん事ハ思ひもよらざ。けまくさぐに乞食して遠き野山の露霜にそぼち雨風に夜をさらして。艱難辛苦志ならんハ。けゞの咎を娘めにあがなふ筈ぞしいひさして。続おかむもあたまなり。かゝる丹墨縄さき丹こちて。松光に物かしこせ。さのことのぞりて。船主にむらひていつるハ。出發のうへ諸国に修行とうけ申すり。出帆どひのこゝめ。とゞりていひといひつ。ふところより。ふき佛龕とり出して。あまハ拙作丹ゆへども。降魔の像丹ておたしませば。途中安穏の出祈丹めとなるなりと。さし出せば。船主あまたゝびいたゞきて。取をさめぬ墨縄又松光にあたせしつこそ前にさゝさせて。又いつるハ。そハおのまあと丹心をこめて作り出せし木鶴なり。長途につゝまなれん時。けゞ鶴に乗りかけて。たゞ丹羽らつく飛

ゆうん丹ゑ天空震旦丹もいたりねづしと包をとけば木作りながらさながら生るおとくあてゞ。ゆくひとしたび翼をひろげば。虚空にひいたんさゆなりなり棹丸とつて額にさゝげ。道のつゝまを忘まんハあまりまゝべき。ちなむけもゆたゞと鶴をとつてさし出せば。船主墨縄に打向ひ。ワ君の厚意謝すべきに詞なし。されど雲水の身丹ゑ一鉢一衣丹こゝ事足りなん邪法幼術の外道の師なりと疑ひ。まんも心ぐるしゝ。志らし折角のたま抱なまば棹丸丹譲りあたへて。ながき代の寶とさせてん。棹丸よく心を用ひて家ををさめて。山人と兄弟の志をしみ。らしなまざまゝ我とかくりし時になるひて人とたからをあらそひて。無やくの罪をつくるべからず。いづまも堅固に世をさゝぶさまよ。さらばとばかりいひさて。立出んとする折から表のかたさゝがしきをくしあどろき見てあまば。以前の廣岡左刀ぬきかざしぬまそなちたる衣のうへ丹

たまきに引ひたしゆゑ入りて。大音にいひけるは水に落たる報答せんと。ふたたび
家に来て見れば。松光めも来れるよ。おのれら日ごろの我らうみ。なでぎり其
しるくらきんと。太刀ふりあげて打て入るを。棹丸得たりとかいくぐり。太刀を
奪ひて。廣岡がえりのとをつかんで。膝に引すゑて。あやつ。おのれが罪おのれ
をせむるといふ事しらぬ人非人めいけおかず。世の人のうれひとならんといひ
さま刀とりあぐるを墨縄しばしとおしとゞめて。きやつ極重の悪人といへ
ども。むかしさき家の死しかひて。いまじ葬送もとげられず。かつ父君の修
行の門出といひ。此家も先人の忌日とさへ弟まだ。あつしかたん事かたぐに
つきて不便なり。されどかくのごとき者。此あたり其たちめぐらばいかならん
冠をかつかまつりてんよしゝ。我によきたりごとありと。縄とり出て廣岡
をくくりて。作れる鶴の脊に。おはせそく。縄のあまりを鶴のくび足に由ひつけ

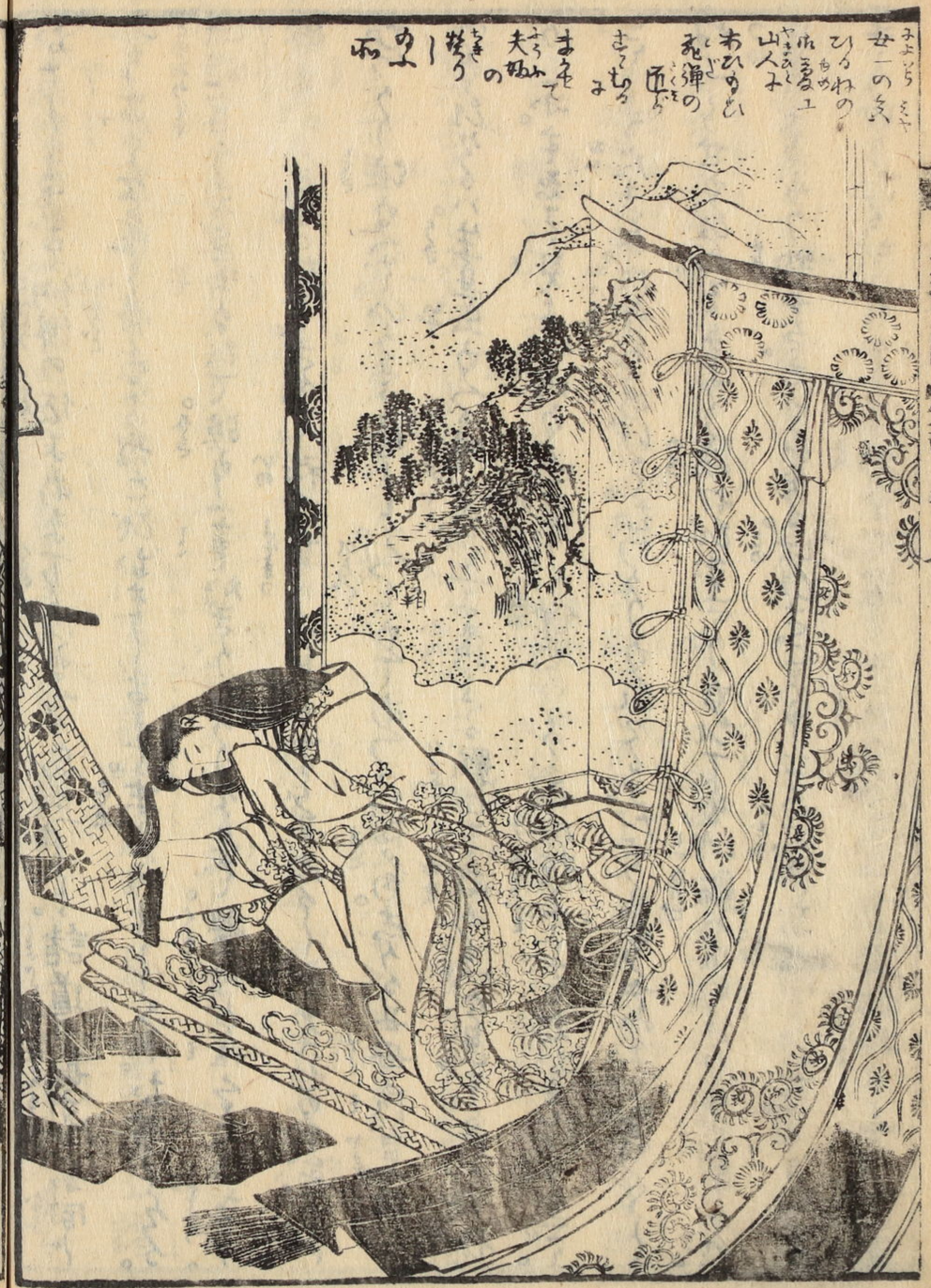
てかゝる不當の悪人は日本の地にはおくべからざ。此まゝまぐに進ひたまちて。
唐高麗へながし物にせんと。木鶴の尾をたしことうてば。不思議や。あの鶴翅を
ひろげ。一声なくと見えけるが。廣岡を負ふるまゝ。西をさしてぞ飛び行ける。
雲井にはて廣岡が声して。おはれしくと呼ぶるが。次第に声も遠くなりて霞
にまぎれて見えざりなりぬ。今にはじめぬ墨縄が機巧のわどをくゝれ。あくと
感ずるばかりなり。船主法師庭にありしもちて。我もかの鶴のごとく。由くへ
定めぎなりぬべしと。杖をひきつゝ立出る。人々もありしもちて。涙とやもに門
おくりして。袖を志ぼりてこうれけるとか。

○夢のしぐち

其ころ帝の御むすめに更衣ばらつゝ。姫宮一人おはしはしける。御姿うつくしく
たをやぎて。ありがたきほかしもち人に。おはしければ。いあしの衣通姫などやれ。

かくやのりなんなど世の人めで覚えなり。もじめ此母の更衣里に下りぬひとく。
此産ありなるに古きならひにて此屋の上に人のぼりて甑をまろばしおとす事
なり女宮生まさせぬふにて北へおとし皇子は誕生にて南へ落さとろ。やつとく
なる此姫宮生まさせぬひなる日あしき取りて例のごとく屋の上へ人のぼりなる時。
大空より鞠ばかりに大きに見へなる物光りかゞやきて棟の上に落ぬ此人おそれ
て屋の上にはらばひて目をとぢてふるひ為なり。何事もなかりなまぢ目を
ひらきて見るに屋の上に物あり。おぼくよりて見まぢ。ひさごのおときかたち
なる物なり。いかなる故ある物なるべしとて。かの瓢をとりて屋を下りて人々に
語りてなる。希有の事なりとて。こなん人おどろきぬ。甚よし奏聞したりなまば。
よきさがにや。あしきさがにやとて。陰陽師宿曜師はさらなり書の博士諸
山の高僧たちに仰せありて占ひやすべきよし勅ありなるに此姫宮凡人にて

おはしまさざ。仙佛の仮にあまたりなるべしと。諸道の勘文をも同じ
ゆうにやなまぢ。帝もよろこびおはしまして。まことのもしくぞおぼしなる。
此姫宮うまれ出ぬひて泣ぬふ事かぎりなかりなまぢ。醫師は此くすりなり
験者かんなぎなどさなく祈りなりなまど。さら母しるし見えさせぬなぞ。はすく
むづかり泣ぬへば。いかなせ居しと人々めてあつかひ。ゆゑ。しる母母は息所の
のぬひなるは生まれ出ぬへる時屋の上に落なる瓢とそ故あるべなまぢ。それを桃
がこに。まゑて見よとのぬふにとく仰せのまゝ母は桃上にさてゑおきてなまぢ。
さしも大きに母は聞きをあげてむづかりぬひなるが。たちまち母みてさやくと
ねふらせぬひぬ。それより後ねびまさりぬひても此瓢は此かたはらなるぞ。
常のまさぶり物にて。しぬひなる此ひさごとやすは大きなるひさごなる。ゆゑ母
きりけりたるかたちしなる物にて。いかしきものとりなつらふ柄杓乃ゆうなる



形なり此姫宮してゝあらひ申さざまで琴碁書画の道にさぐくらき事
なく上手にておはしけまで。ゆゑ凡人にはおはさじなど。へてさゝ申さ夢へ
けり。ある日姫宮は母なるひ志さして机によりておねふりなひけるに夢に見
なひける事。あやしき賤の家とおぼゆる所に日ごろ手ならしなへるひさごの
庇に釣りてありけまで。おどろかせなひて。是は我をさなき時より。かさゝら
ばなるべき持ならしつる瓢なり。いかに志くとゝ母にあるぞとのなふに内より
人出来てと是を我家に由ありて持つゝ瓢にてゆゑんおとなき店
にしりあるいかでかゝる物のゆゑんといふを見なべき。鄙にはめづらしく。あて
なる人にて物いひしる声も。さるやう母おかしけまで。志ばしおまゐりておはし
けるに。かゝるに匠の木どもあつかひてゐるが入来ていふ事。店前には此
あるじと。ふるき繋りおはせぬ女夫になりなひなんとて。手を取りて奥ざまへ

あて行く。此家のさま若まで。あぢらなる所も見由まで。さまでが母調度などは。
故ありげ見て。むくつけき。而なる人のさまにはあらざ。心ならざ。そしり居
なへ是は匠杯取出て。かのうつくしき人を我まへにまゐて杯くみかはしなど
さて此男を見なふにはじめ見しよりはちかまさりしていとどうつくしかりけまは。
扨も為さしき人にてあまは内にしり母行かふくしは冠装束などこそうるはし
けまさてがたちは此人に似たる物もなし。これは此人の妻にてあらなんと見えて
さておかしらひてゝおはせて極思ひかけざ父は門の店声して守としてまゐまでしく
のなへば此男さるまでなしに出づ。店とぶらうもいとく驚きなひけるが。汗も
志とになりて店目さめなひぬ。さるは机母よりおはしてかり初に見なひし店愛
まぞありける。店側にさふらひし人に店湯などもちまゐりて。いう母おそらに生さ世
なひしにかは。店多をさへあげさせなひきしとやき。店心のうち母もいと思ふぞなる

曇にこそありけれ。さるまでも今ひとしたびさる姿を見ずやとおぼして其のち
あと更に机によりゐるべき所もあるねばまして姿なぞ見させまゐらせしとなく。
しで見しおもかげの忘しくて。そこゝろなる所おもひとなりてあらしくらさせ
なひけるを。

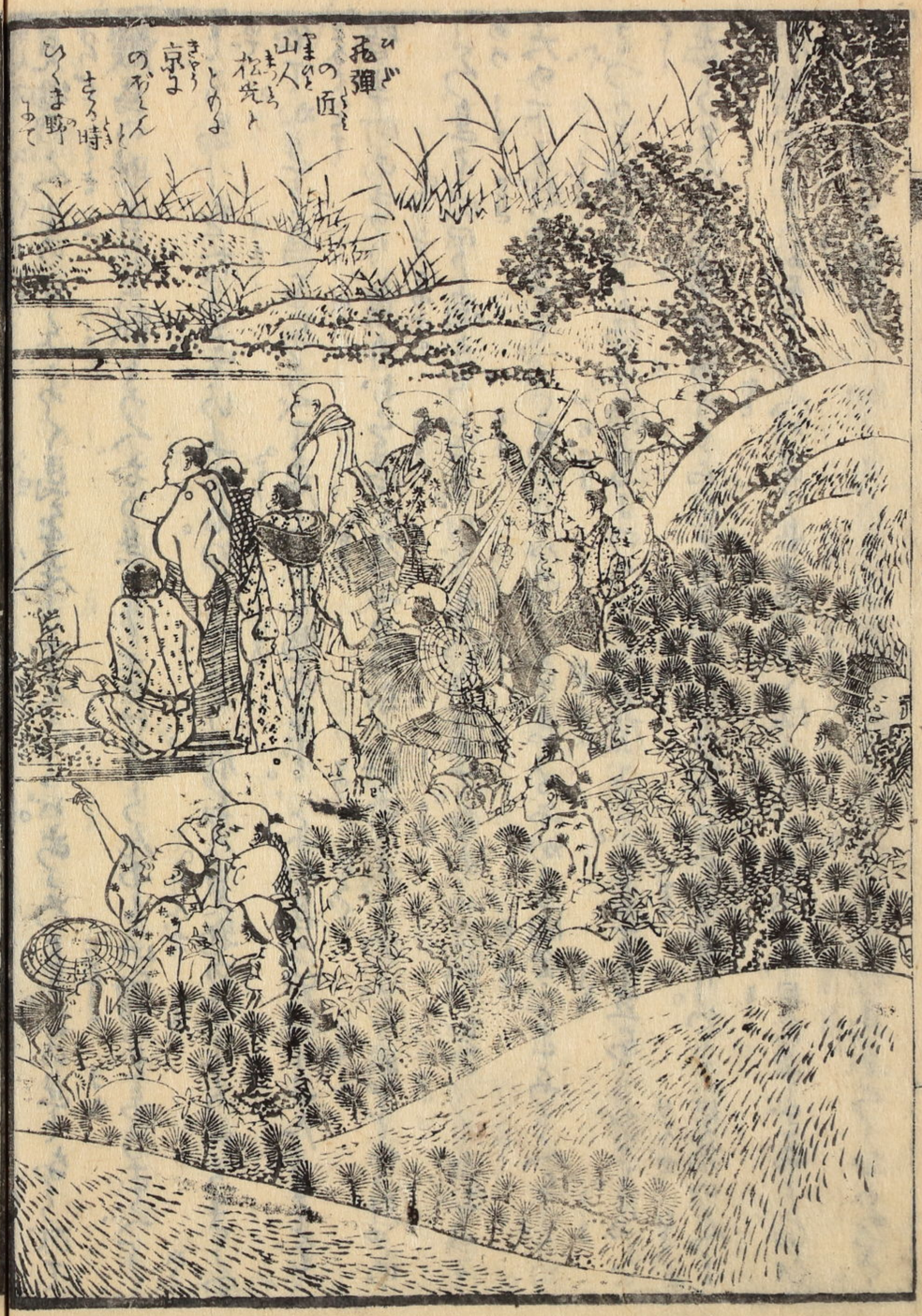
○都のわかれ

墨縄ハ船主があつらへし堂つくりもてて。都にのぼり行つしとて。樟丸に別れて。
山人が方へ来りける。山人ハむらさきが死らせしよりこ世中あぢきなく思ひとり
てかきあわりてのこゝろしゐるゝ丹村長のめとありさしたる事あり
今来よと呼に来りければ往るに。そこの家にとし夫役つとむべき時に
あらりぬとく出たちて京へ登るべしとゆふ足ハそのうへ定まる事にて國にしと丹
百姓のかぎりハ京にまゐりて大内の下となりて其職をつとむる事なり。山人ハ

いなむべきにあらねば。あとうけしてく家に残りける丹墨縄松光とく来てあれ
ば。村長のひひつけし事を語る母がいはく。それハいとう早しき事なり。かゝる
田舎にまを居ひぬれば。みやびたる事ハ姿丹ぞに見ずいとづらに草樹と共に
世を終らん事のなげかしくて。いつゝ居ましとを京にのぼせやりてく。為ぞとなき都
のてぶりをも見せましと。年ごろ思ひ已とりけるに。さいはひ丹ありてあれまして
墨縄君ものぼりなんぞ。道のわどもおぼつかなからざ。我をるまでの程ハ樟丸
がかしに丹行てく。所所の為りを待つべき生ぞ。心丹かけずして。とく出たちねといふ。
墨縄松光もこの丹よろこびてく。とかくの用意して。甚日となりて樟丸も来りて
ねんごろ丹ゆと居ぶひ。椿丹も例の木馬にそこよ生とて。かたごなどのせて
おのく菅笠にいらぐつをきて出たつ。樟丸ハ道まぐおくりて。母をつれて
石濱へ為りぬ。さて三人ハ木馬をひきて。かたるくのりて行ける丹。出ませを本

作りなりとハ。さらに知る者なかりけり。初夜ハとなり。あらつきをちちつく
行くて。引馬野といふ所にいたりね。てハ持統天皇の衣ゆかせ旅の
志るしにとよはせなひし名どころにて。いとひろき大野なり。人おまた集り
をまだ。たらざとて見まだ。つゝき男の馬にのりて走らせ面なり。見る人々
みな物さる事。かぎりなし。此男馬より下りて。かしらいしきおもちして。人とは
むかひていひけるハ。馬の性ハよく走る物なまど。乗る人未練なまば良馬といへ
どもよく走らず。世に千里を走る馬あらば。おの生が乗らば二千里を走らせ
べし。むかし穆王の馬ハ足土を践まず。一夜の中に萬里を行しとうさまば。
馬の話ハしぐ走るにあり。世にいかなるあがり馬ありとも。おの生なりて手
綱をとらんにはしらず。こちに乗りまゐて見せ乗らせんまでは本のうち
に手綱の取りやうを知りしる者なく。又馬をよく走らせるものなし。

見物の人々の中によく馬を走らせ人あらば。あらはしに。おの生とならびて。
競馬の勝負を試とみへ。おの生のしまけしらんにはこ此頭をとらせべし
とらなじをたらきていふさぬいとあらり顔なり。見物の中より。つゝき人
出て。かまと馬をなくべて走らせる物あまど。ぞかまがいひしかたらさぞ。
皆半町あまり。乗りおくまて。及ぶものなし。此ある人といよく感じてほめ
しろまを此男扇うち。笑き。ひぢをいからせて。おあふぎつゝいひけるを。およそ
天の下に我にまさべき馬のりハあらざ。あるにかゝる田舎にまゐる人などの
まづかに耕のいとなに。痩馬にのりしる分際まで。とまと立ならびて。馬を
走らせんとハ。嗚呼なりとやいはん。かしらいしき事なり。いかに見物の人々
我頭をしとおぼさん人ハあらん。丹素つゝ。はしりくらべて。見なはずやといひ
てたらゆかに笑ひて。むしろの上に。丈六かきて居しり。松光にくらおもひて。


飛彈の匠
山人松光と
京よ
のぼしん
さる時
ひくま野
にて

季朗が
馬を走らせて
ひこりたるを
えて
松光
木作りの
馬にのりて
かれと
猪頁を
あらそふ
而

ひそう丹山人はさしやきなるハ此男の馬をたしらさ事なゆしといへども
さきふ。おのは師の作りたる馬に乗りて。かけさせたるゆゑ。及ぶべからず。
此男あまりに人もなげにあらるが。ゆくゆくは木馬を引出て。かはと勝負を
あらうそんと思ふなり。されど例のごとく走りてなるゆゑ。あと来し道にかへり
なん。とゞむづき時に。とゞむづき法やはといへば。墨縄笑ひて。木馬の舌を
とらへて前にひかれ。忽とゞまるやうに作りてあり。さまでゆくなきあらそひ
なれば無用なりといへど。松光笑ひはざ馬にはけたかはどをおろし馬の
上にまたがり手綱とりて。あゆませそく。かの男にいひけるハのゆふがおとくく
ならば。世に未曾有の馬のりにておはしまらん。いざ勝負仕りてんといふ。
墨縄山人は笑ひをかくして見ゆたるに。かの男は扇をつかひゆゑて。松光が
方を見て。腰のさゝゑざる大方ならぬは置ひある人と見えてゆ。おのはが頭を

店所望にはやと。そせ笑ひて。手綱とつて。ゆらアと打のり。松光が馬丹鼻
をならべていざといひさゝ。かけさせたり。松光ひざと二三間おくれて。かゝ
させつれどつよく綱を引つめつれば。木馬は矢を射るよりはやく。中を
飛んでたしアぬ。松光馬場の堺にて。木馬の舌を引ければ。案のごとく
とゞまりぬ。ふりかへり見れば。かの男は一町餘りおくれたり。見物の人に松光
をわめとよみて。かしましきまでさゝぐ。扨馬をおなたに引むけるのどう
にあゆませそく。かの男にむかひて。不思議に勝を取りてゆ。さしも天下丹双
なき人のいかりしておくれゆひしといへば。かの男手をさうて。松光ををがこ
て。あたれゆゑ志き道の達人にておはせるかな。おのれ士とやさ家より馬
術に心をいれて。天下に敵なしと存じゆに。君のおとき人も。おはしゆゑ
といふ見物のもの。かれをにくがりて。契約なれば。頭をはたしゆへといへば

かの男頸をちゞめて頭のひとつふたつ。惜しとも存せざるほど。こゞ命の
惜しくはまして田舍人の頭なほど。都のつとにも見ぐてなくはたんまぞ。はゞ
胴に頷けてゆへそなたにても用なき物ながら。我方にありては。重寶の物
にてはとふるひくいふ松光笑ひて。そふの對面のひき出物に頭はつねしにある
なりといへば。此男よろこぶ事かぎりなし。掬松光が馬をはくぐ見て。天晴
の佐馬にてはの最前より。きゞしが程。いさゝか嘶ぶに鈍さゞるも。名馬乃
あるし也ては。夜中敵陣を襲ひ。ゆに兵士枚をふくみて。音をしてざる時
かゝうの馬ならざるほど。用ひがたし。掬もかぎりなき逸物にてはと。追從
さてるを。おるくしのゝ志り笑ふ。墨繩又松光をして。木馬にかたど負たせて。
そこを出て行とて松光に向ひて。かゝる戲まで。無益の事ぞといへば。松光
よほどそふなりいとゞしくくにをめくほて。面目を得ぐはひきとて笑ひ

はく行く一里ばかりゆきて山人ひらぐつにあしをくたほて。術なしとて。なゝみ
なほだ。まゞ日は高々ほど。此あたりに。扁りとらばやとて。折見つゝ行けば
人の家あり。入りて。志りくとゝいへば。妻と見へて。四十ばかりなる女の眼するどげ
なるが出て。我家人をとゞめざ。私に行きて物せよと。まげなくいふに。足を
いためたる者のはひて。あゆみなゝみてはいらでゆるさせなひて。一夜明させ
なひなんといへば。かの女大なる声して。心なき旅人かな。とめじといはゞ。とく
出てゆくべきを。あながち母何をかいふ。とく出て行きねといひさゝ。人ゝを
つき出して。戸おしたてつ。人ゝは。掬も情しらぬ女かなと思へど。せんかたな
なほだ。まごく出て行くに。又戸の内より声して。旅人まつ待なへ。中べき
事あり。まち入りなへといふに入りて見ほど。あるじと見えて。六十ばかりの
翁の眼盲たるが。たゞ出て。足を病をなへる人のおはさしとや心ぐるしき事あり

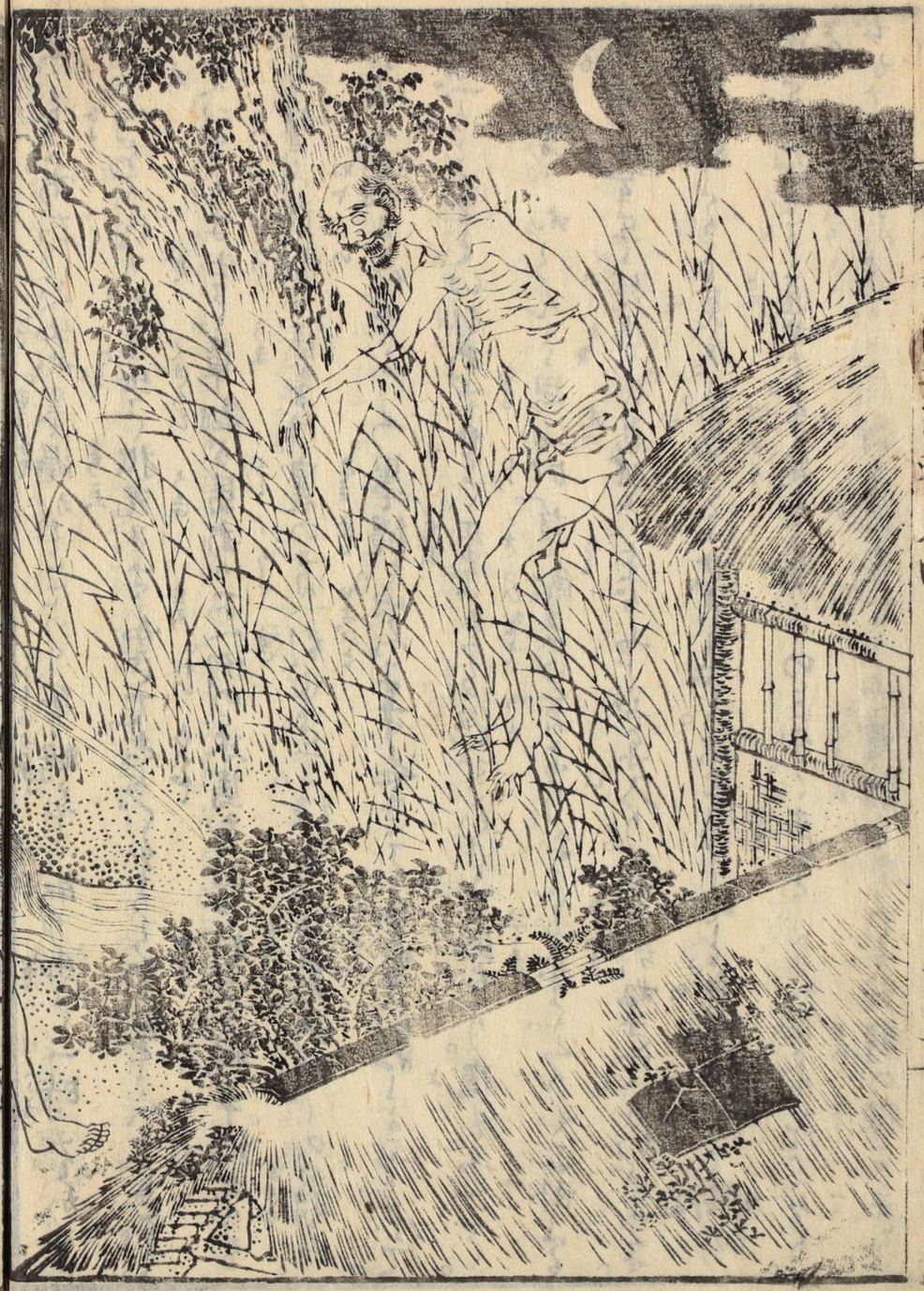
やぐめ乗らせん。とく〳〵つらぐつを。ときゐくといへば。女もたらぐちて
翁をあらみて。今宵は草飼どのも来んとのゐひしに。旅人をさへしぐむ
べしやはといふ翁耳にもいまぐ。奥の方を指さして。かしこに離れしらる
家あり入りていまひゐへして。こゝろたにいひつけて。くるをいざなはせ。又
同じこゝろ。ゆゑけのまゝなひなどさまやり。くるは一間に入て。あるじが
あらゝざしをよろこびて。いひたやす。松光木馬をば庇の外に繋て。かたご
取りて奥に入らんとする時表の方より人入来り。此の男は。大野の
草飼とて此女の兄なり。生まつき邪なる者にて。ねたひと心ある男なり。
妹を此主に遣て後翁が財多く田畑などあるを持てるを見て我物にせばや
と思ひて。かねて妹と計るに妹も老たる男を厭て兄とひとつに成りて財
ども奪て此家を遁れ出んのこゝろ有り。扨この草飼入来て妹とさし並

て翁に向ひてをるを松光目をつけて見れば。さきに引馬野にて馬をたゞ
あらそひたる男なりけり。驚きながら。しらぎて。部つゝりて聞耳たてゝ居れば。草飼女
に向ひて奥の客はいづくよりぞといへば。見もしらぬ旅人を翁のとめらるゝ
なりといふ。草飼眉をしかめて頭をかけば女硯をとり出て。何事をか紙に
かきて見せ見ば。草飼も又筆とりて書けばとて。たがひにいくたびか。
思ふ事をかきかはして見つ見せつさるを翁はさらぬ。松光この
兄と妹が振廻あやしく。こゝろえぬことおもひあり。しらるに表にかの男の
乗り来る馬をつなぎ置たるが。俄にくるひ出てゐなきゝ見ば。草飼も女も
表の方に出て見る時ひ。松光ひそかに出て。あるじのかたゝらなる外ども
とり来りて。山人によりて見ゐへといふに。笑き見れば。草飼が手と見えて
かきつけたるは折あしく旅人をとめつ。兼てのたりぶと。今宵は行はれじと

かきてあり又女の手にて旅人は別屋に臥たれば其事あらじ今雪
の内にともかくもたらひ申し明日となれば翁が子の旅より帰り来べし
しらばねは海にいるべければ人しる事あらじとかきてあり墨縄もとり見て
驚きて扨は此男女いひあはせて翁を殺さんとするなるべしかくきゆつかな
いかで此よし翁にしらせてんなどいひ而しるに口ふけりて走て人にも
さらむ翁壁をさぐりつゝ奥に来て見るさべき物もはなれば折ふし子なる
ものゝ旅にまかりてはへば萬しいぐしく心にまかせはなれてといふ墨縄翁を
行隅にまねきて声をひきくなして かうくの事ありと告れば翁驚きて
いひけるは かれはおのれが妾にてはし此事已れも日ごろうたがひ思ひはべども
かれらがたりの巧せんとは思ひはなれてとをのけば まづしらざ頼つかり
て而申へおのれはたらふべき事ありかうくなしかへと教へければ翁はふし

をがとて あなしく出ね墨縄かたどより斧鋸など取り出て一時ばかり
して何をか作りけん出て松光にさしかきて しらべたらくとをしくければ
松光ひそうに出て草飼が馬あるにへ例の木馬をひき行て鞍手綱をも
とり替て草飼が馬をば裏の方へ引ゆきて はなぎ置ぬ あるじの翁は
宵より閨に入りてふしつ墨縄は山人にさしやきて今宵はいねたるふりして
眠るべからざと いひあはせて 平にそらいびきかきて臥をり夜もふけて
丑にやなりぬらんと思ふ比草飼表の方より おき出来てくりや丑臥たる
女にさし寄て足音を忍びて主がかしど丑入り太刀引ぬきてうかがふに
よくいねたると見えて息づかはせざれば志き寄しぬと無つかりて胸の
あたりをさし通せば手足をもがくのこゝにて声をばなにたてずて死てけり
女かたどを持来りて死骸を入れんとして草飼とやとも丑死骸の腰に手を

草創
妻と
あるじを
死骸あんを
おひかけ出れば
あん門なる
馬に
のりて逃るに



かけつけまゐる思ひがけずも主の死骸むく〳〵と起あがりしが。ワッとさけびて女も草飼も表の方にかけ出す。此死骸手をのばしおふりつゝ猶おひて表の方へ出けるぞ。おそろしくて魂も身にそはぬ心地して戸をおしあけてかけ出ぬ。女も同じく走り出んと草飼あとにつゞく中にも。ひさしの外に繋ぎたる馬ひき出し。女をもかきのせ我も尻におのりたるに此死骸猶追来ぬるに地をとゞろかすごとく。あとを逃ばやと。手綱をよく引つめたる馬は東をさしてかけ出しける。幽霊も追来ぬるをかまはず馬をあふりてのがれんとせしかども此馬もたへかねしや。とぶがごとく一丈あまりに走る事たとふべき物なし。女は幽霊よりも此馬に恐怖をうしなひて諸入るかたりにありけるを男は引とゞめんとしけれど馬のはやるにまかせたるが。天竜川といふ川に入りたる時目もくらみけるにや二人ともに水に落て。すぐに死する馬は川をわたりて猶東をさしてかけ出しけるとぞ。さて墨縄

山人は奥より紙燭さして表に出て見るに。案のごとく女も草飼は見えず。ひさしの下なる木馬もあらねば。扨はそれにのせて草飼めら。木馬にのせ走りけるならんと心ぞ。山人が知らず川に陥りて命失ひぬべし。心もとなき事なりとて松光おなじの方より。あるじの手をとり出ぞ。宵にひそかにおせ倉へともなひて。とめに今まで忍び居たりといふ。翁もまたもなく不思議の命ひろひし事よ。あまりうれしさよろこびなみだなかしけるに。詞もなかりしとふしぎがむ。松光月かげに向ひなる方を見ればかのあやしき人の立て何ひをする者あり。かし草飼めが立かへりけるならんとおもひやとつか〳〵と走り行きてうしろよりむずといだきとらへ汝は草飼めと声かけしに此人のこゑもせず手をとらへぬれば草飼にあらぬとおどろき物を見らしとのぞけばよく見れば昨日墨縄がつくりける木偶にて主は翁のかほを甚まねびよく似せたる物なり。是は松光宵に

翁を閉より引出して。かたりに此木偶を入れおきしが。機関を用ひて。其の木偶のおのれとあゆみ出んとは思はざりしとて。手をたゝきてぞ感じける。夜あけねれば。人々立出んとするに。翁ひとまたらにとゞめ申れど。かざりある旅なり。又あそと繋りて。松光にかたど荷をせて。別れて京へぞのぼりける。此翁は榛原の某とて。昔より家に住まて。西忍よしある百姓なりとう。かの木偶は其のち此ことゝりの寺につゝえて。飛弾の匠が幽灵の像とて。什物となしけるが。後の世の兵火に跡もなくなりて。今は其寺の名ぶにしるのみなし。惜むべき事なりかし

飛弾匠物語巻之四終